

令和 5 年 6 月 23 日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04521

研究課題名（和文）ルソーの自伝的著作群の教育思想史的再検討

研究課題名（英文）Reconsidering Rousseau's autobiographical works in the context of history of educational thoughts

研究代表者

室井 麗子（Muroi, Reiko）

岩手大学・教育学部・准教授

研究者番号：40552857

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：ルソーの自伝的著作群を彼の教育思想のメインテキストとして、とりわけ彼の「自己教育」「自己形成」のテキストとして捉え、「霊的修練」ならびに「記憶論」の視座から（教育）思想史的文脈の中で再読した。ルソーは、自伝的著作において内面性の探究の記憶を追憶するエクリチュールによって自らを顕示することで、そのような彼の存在や生き方を許容しない市民社会をその内部から告発したのであり、それは同時に、社会に抗い生きる「近代的個人」としてのルソーの自己形成の実践であったことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで教育学研究においては『エミール』読解のためのサブテキストとして扱われてきたルソーの自伝的著作群を、彼の教育思想のメインテキストとして再読することで、社会に抵抗する自己形成の実践という、ルソーの人間形成論の新たな側面を提示した。また、ルソーの自伝的著作群を社会への抗いのテキストとして捉え直すことで、晩年のルソーが自伝的著作を書き続けたその動機的一端を明らかにすることができた。さらに、「自らについて書く」という実践の人間形成的意義の内実の一端も示すことができた。

研究成果の概要（英文）：I grasped Rousseau's autobiographical works as the works of his educational thoughts, especially as texts of his "self-education", and reexamined them in the context of history of educational thoughts, from the perspective of "spiritual exercise" and "theory of memory". This study came to the conclusion that Rousseau manifested himself in ecritures of his biographical works which recalled the memory of looking closely into himself, thereby accused from the inside the civil society that did not accept his way of life. These ecritures documented at the same time Rousseau's practices of self-formation as modern "individual" who lived his life and resisted the society.

研究分野：教育思想史・教育哲学

キーワード：ルソー 自伝的著作 教育思想史

1. 研究開始当初の背景

「独学」や「自己教育・自己形成」の重要性は今日の教育においても認識されているが、それは「学校教育」の重要な「手段」としてであるといえる。しかし、自己教育や自己形成は、元来、単なる手段ではなく、教育（人間形成）活動の中心に置かれるものであった。実際、古今東西において、宗教者や思想家・哲学者らのそれをはじめ、多種多様な自己教育・自己形成の実践を見出すことができる。

このような自己教育の重要な実践者の一人に J.-J.ルソーを挙げることができる。ルソーは、体系的な学校教育をほぼ受けたことがなく、生涯にわたる独学・自己教育を通して自ら自身を形成し、そうして自らの思想・哲学を構築した。彼の教育思想ないしは人間形成論もまた、流動的な現実に対峙しながらの自己教育によって練り上げられたものである。かくして、ルソーの教育思想・人間形成論は、極めて多面的・多元的・重層的なものとして私たちの前に立ち現れるのである。

2. 研究の目的

本研究は、以上のような問題意識のもと、ルソーの自己教育・自己形成の内実および意義を（教育）思想史的に解明することで、独学や自己教育・自己形成そのものの意義や意味を再考することを試みた。そのうえで、このような自己教育・自己形成こそがルソーの教育思想・人間形成論の肝要であると捉え、彼の教育思想を多面的・多元的・重層的に解釈しようとしてきた従来の研究を踏まえながら、自己教育・自己形成という視座からその再解釈の可能性を探った。

具体的には、フランスの思想史研究者 P.アドがその内実の解明に取り組んできた「霊的修練 *exercice spirituel*」や、近年活発に研究が展開されている「メモリー・スタディーズ（記憶研究）」のいくつかの理論を分析枠組みとして、ルソーの自伝的著作群を再読することで、これら著作の哲学的・教育（思想史）的意義の解明を試みた。さらにこの試みをとおして、従来の教育学研究では『エミール』読解のための言わばサブテキストとして扱われてきた自伝的著作群をルソーの教育思想のメインテキストとして再読し、そこからルソー教育思想を「自己形成」の思想として再解釈するという新たな方向性の提示を旨とした。

3. 研究の方法

以下の4つの方法・作業を中心に本研究を遂行した。

(1) 「霊的修練」における「自己修練」の考察・分析 本研究の分析枠組みの精緻化

P.アドの文献読解をとおして「霊的修練」における、「自己をめぐる修練」についての整理・分析を進める。

(2) 記憶理論の考察および分析 本研究のさらなる分析枠組みの探究

記憶研究におけるいくつかの記憶理論を整理・考察・分析し、ルソーの自伝的著作群を「記憶」の視座から再読する分析枠組みを探る（なお、この作業は、本研究を遂行する中で着手の必要性が生じ、取り組んだものである）。

(3) 18世紀における「市民社会」をめぐる議論の考察・分析

18世紀にさかんに議論が展開された「市民社会論」を考察・分析し、ルソーが政治的・教育的・自伝的著書作を執筆した背景を探る（なお、この作業は、本研究を遂行する中で着手の必要性が生じ、取り組んだものである）。

(4) ルソーの自伝的著作の再読

上記(1)～(3)で得られた成果をもとに、ルソーの自伝的著作を、教育思想史的に再読することを試みる。

4. 研究成果

本研究において得られた成果は下記の2点である。

(1) 18世紀に展開された「市民社会論」におけるルソーの立場を検討し、それと関連づけながらルソーが自伝的著書作を執筆した背景や動機を解明した。

18世紀のヨーロッパでは、社会契約論を批判し、人間の社会的紐帯は自然発生的に形成されるという前提からの社会論の組み直しを試みる「市民社会論」がさかんに展開される。そして、そこでは、「感情」に、個々人を結合する原理や紐帯が見出された (Foucault, M. (2004) *Naissance de la biopolitique: Cours au Collège de France, 1978-1979*, Gallimard/Seuil = フーコー (2008) 『生政治の誕生——コレージュ・ド・フランス講義 1978-1979 年度』慎改康之訳、筑摩書房; Ferguson,

A. (1995) *An Essay on the History of Civil Society*, edited by Oz-Salzberger, F., Cambridge University Press [原著: 1767年] = ファーガスン (2018) 『市民社会史論』天羽康夫・青木裕子訳、京都大学学術出版会)。このような市民社会論や、それを具現する「感情の共同体」としての市民社会に、ルソーは批判的に対峙する。ルソーによると、人間の感情は社会が惹起したものであり、よって自然発生的な社会的絆としての感情はありえない。それどころか、社会が惹起した感情こそが人類を墮落に導いたのであり、感情の共同体としての市民社会は人類の墮落の歴史の頂点に位置づけられる、とルソーは考える。ルソーは、『エミール』(1762年)において、墮落した市民社会の只中であって、人間が、いかにして墮落を免れた「自然人」として存在し生きうるのかを教育の課題として模索した。他方、市民社会が捏造した彼自身のイメージに対して「個人的存在ジャン＝ジャック」を取り戻すための抵抗の実践、すなわち「抗いのエクリチュール」の実践が自伝的著作であった、と指摘しうる。

(2) 以上のような、市民社会に対する「抗いのエクリチュール」の実践としてのルソーの自伝的著作の(教育)思想史的意義を、「霊的修練」における「自己をめぐる修練」および、「記憶理論」の視座から、明らかにした。

自伝的著作の一つ『孤独な散歩者の夢想』の中でルソーは、自らの夢を、「自己研究」と呼び、自らの魂と語り合う喜びに浸る「瞑想」として描いている(Rousseau, J.-J. (2014) *Les Rêveries du promeneur solitaire, Œuvres complètes*, t.XX, Classiques Garnier = ルソー (1981) 『孤独な散歩者の夢想』佐々木康之訳、『ルソー全集 第2巻』白水社)。アドは、このようなルソーの実践を、古代にまで遡る霊的修練の系譜に位置づけ(Hadot, P. (2002) *Exercices spirituels et philosophie antique*, Nouvelle édition revue et augmentée, Albin Michel)。その実践においてルソーが至った、「完全にこの現在の瞬間に生きる」という状態は、まさに霊的修練において目ざされるものであったと指摘する(Hadot, P. (1995) *Qu'est-ce que la philosophie antique*, Gallimard)。B.カルネヴァリは、アドの見解を一定引き継ぎつつも、ルソーの自己実践においては、個人性と普遍性とが古代とは異なる形で関係づけられていると指摘する。ルソーは、社会に対して反抗するという自らの存在を生きたのであり、そこでは「この私 le moi」が真の主演であり、このことが自伝を書くという実践において明確になるのである(Carnevali, B. (2010) *Le moi ineffaçable: exercices spirituels et philosophie modern*, Pierre Hadot: *L'enseignement des antiques, l'enseignement des modernes*, 2e édition, sous la direction de Davidson, A.I. et Worms, F., Édition Rue d'Ulm)。これらの指摘に鑑みると、ルソーの自己研究ないしは自己探究の実践と、それらを自伝的著作として描出するエクリチュールの実践は、市民社会に対する反抗であり批判そのものであり、さらにはそのような反抗する自己の形成の実践であったと言える。

さらに、M.アルヴァックスの集合的記憶論の視座からルソーの自伝的著作を再読し、以下のことを示した。アルヴァックスによると、(市民)社会という「大気(空気)」のようなものは、それに抵抗することによってのみ自覚されるのであり(アルヴァックス (1989) 『集合的記憶』小関藤一郎訳、行路社)。したがって「集合的・社会的」と「個人的」という記憶の位相それぞれが、抵抗によって自覚されうるのだと言える。ルソーの自伝的著作は、先にも述べたように、市民社会への抵抗と批判のテキストであり、それらは社会における記憶の多様な位相を顕現させ、ひいては、社会を変容したり変革する契機となりうるのではないか。市民社会の中での自らの異質性を「個人的記憶」としてあえて強調するルソーの自伝的著作は、その後の社会的・集合的記憶のありように一石投じることで、社会変革の術を示唆しているのではないだろうか。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 室井麗子	4. 巻 第31号
2. 論文標題 書評 坂倉裕治 『期待という病はいかにして不幸を招くのか ルソー『エミール』を読み直す』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 フランス教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 93 - 96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 室井麗子	4. 巻 第29号
2. 論文標題 図書紹介 ジャン＝ジャック・ルソー著『人間不平等起源論 付「戦争法原理」』（坂倉裕治訳、講談社学術文庫、2016年）	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 フランス教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 123 - 126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 室井麗子	4. 巻 第125号
2. 論文標題 「市民社会」という感情の共同体とルソーの異論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育哲学研究	6. 最初と最後の頁 1 - 7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Reiko Muroi	4. 巻 Vol. 7
2. 論文標題 Rousseau's Dissent from "Civil Society" as Community of Emotion	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 E-Journal of Philosophy of Education: International Yearbook of the Philosophy of Education Society of Japan	6. 最初と最後の頁 25-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 室井麗子
2. 発表標題 「市民社会」という感情の共同体
3. 学会等名 教育哲学会第64回大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高宮正貴、生澤繁樹、藤井佳世、エディ・デュフルモン、室井麗子
2. 発表標題 教育（学）と政治（学） 「翻訳」から捉える交差と懸隔
3. 学会等名 教育思想史学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 生澤繁樹、室井麗子、藤井佳世
2. 発表標題 教育哲学と社会批判の（不）可能性
3. 学会等名 教育哲学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 木村元・汐見稔幸（編著）、〔室井麗子（分担執筆）〕	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 268
3. 書名 教育原理	

1. 著者名 教育思想史学会（分担執筆。「ストア派」の項目を執筆担当）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 888
3. 書名 教育思想事典 増補改訂版	

1. 著者名 山名淳（編著）、〔室井麗子（分担執筆）〕	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 316
3. 書名 記憶と想起の教育学 メモリー・ペダゴジー、教育哲学からのアプローチ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------